特集

歴史と演芸で親しむ「忠臣蔵」

笠間にもゆかりがある「忠臣蔵」。

笠間と忠臣蔵の関わりは、赤穂浅野家の長矩（ながのり）の曽祖父である長重（ながしげ）が笠間藩主としてこの地に入ったことから始まりました。

長重から始まる笠間藩には、後に四十七士を率いた大石内蔵助（おおいしくらのすけ）の祖父である良欽（よしたか）をはじめとする義士とのゆかりから、今も彼らの足跡が私たちの地に息づいています。

また、忠臣蔵は歌舞伎や講談・浪曲・落語の題材として、今もなお人々を魅了しています。

市出身・かさま応援大使で現役最高齢103歳の曲師 玉川（たまがわ） 祐子（ゆうこ）さんの活躍や、11月7日に開催された「忠臣蔵サミットin笠間」での六代目神田（かんだ） 伯山（はくざん）さんによる講談会、そして市内で行われているさまざまな演芸会。

いま、笠間で演芸があつい！

今回は、忠臣蔵と笠間のゆかりを振り返りながら、「歴史と演芸で親しむ忠臣蔵」をお届けします。

忠臣蔵ストーリー

元禄14(1701)年、江戸城内の松の廊下で赤穂藩藩主・浅野内匠頭長矩(あさのたくみのかみながのり)が高家肝煎・吉良上野介義央(きらこうずけのすけよしひさ)に刃傷に及びました。

浅野長矩は即日切腹となりましたが、吉良義央はお咎めなし。

元禄15年12月14日、大石内蔵助をはじめとする赤穂義士が、亡き主君の浅野内匠頭長矩の仇討ちを実行しました。

長矩の刃傷事件と赤穂義士の仇討ちは「赤穂事件」と呼ばれ、後に「忠臣蔵」として広く知られています。

歴史をつなぐ人たち　笠間義士会

忠臣蔵と笠間のゆかりを後世に伝えようと、昭和5年に有志により義士会の創立が呼びかけられました。昭和 27 年頃に「義士顕彰会」を発足。戦争のため一時活動が中断されたものの、時代の安定に伴い、昭和41年に大勢の市民の賛同を得て復活しました。昭和 47 年に大石内蔵助銅像が佐白山ろく公園の笠間城跡に建立された後(平成 30 年4月に大石邸跡に移設)、「笠間義士会」となりました。

❖ 毎年 12 月 14 日の赤穂義士が討ち入り果たした日には

義士たちが討ち入り前にそば屋で休息したことにちなんだ「笠間そば講」や、討ち入り装束で笠間稲荷門前通りを練り歩く「義士パレード」などが行われています。

❖ 笠間義士会創立 60 周年イベント

昭和 41 年の復活から今年で 60 周年を迎え、12 月 14 日には、記念イベントが行われます！

［日時］ 12月14日(日)

1. 義士パレード
   ［時間］午後1時～(午後0時30分笠間稲荷神社 稲光閣集合)
2. 設立 60 周年記念特別講演会
   講師：中央義士会・日本城郭史学会員 武類(むるい) 俊哉(としや)さん「笠間と赤穂義士の関係」
   ［時間］午後2時30分～　［場所］笠間稲荷神社稲光閣
3. 講談
   講談師の神田(かんだ) 菫花(すみか)さんが赤穂義士伝を披露します。
   ［時間］午後4時～　［場所］笠間稲荷神社稲光閣

問申 かさま歴史交流館 井筒屋　TEL.0296-71-8118 ※講演会と講談は、有料で事前申し込みが必要です。詳しくは、お問い合わせください。

浅野家と笠間のつながり

赤穂藩浅野家は、赤穂藩主の前は笠間藩主を務めていました。

関ヶ原合戦の後、江戸で隠居生活となった浅野長政（ながまさ）は、徳川家康から隠居領として真壁郡・筑波郡に五万石を与えられました。

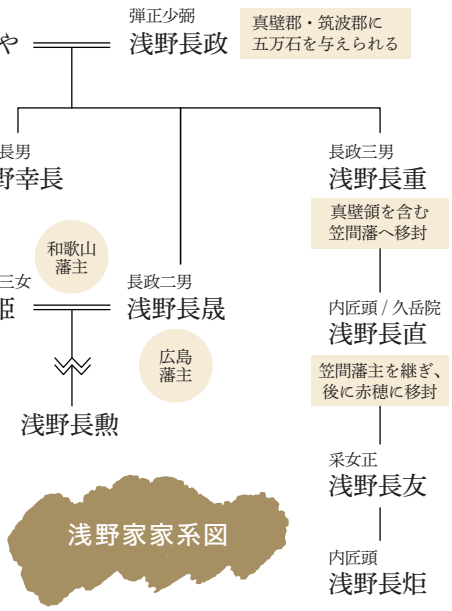
長政の三男・長重は下野真岡藩が与えられていましたが、父・長政が亡くなると、常陸真壁藩を受け継ぎ、大阪の役の活躍に対して加増され、元和8年（1622）、真壁領を含む笠間藩へ移封しました。

長重と長直は2代にわたって笠間藩主を務め、長直の時代に赤穂藩へ移封となりました。

このような経歴から、赤穂義士の中には、常陸国や笠間との関わりが見られる人物がいます。

笠間藩領の内常陸国領の村々

※『新笠間市の歴史』挿図より作成。村名は寛延4年領地目録より。



笠間とのつながりのある赤穂義士

勝田新左衛門武尭（かつたしんざえもんたけたか）

勝田家は常陸国本木村出身であり、武尭の曽祖父・重尭が長重に仕えると、武尭の祖父にあたる新兵衛も笠間藩主時代の長直に仕え、赤穂藩にもついていきました。

堀部弥兵衛金丸（ほりべやへえあきざね）

金丸の祖父・助左衛門、父・弥兵衛は真岡藩時代の浅野氏に仕え、金丸自身も長直・長友・長矩の三代に仕えました。赤穂移封時には長直に仕えていたことから、義士の中で唯一、笠間藩士の身分でした。堀部安兵衛は金丸の婿養子であり、四十七士随一の剣客でありました。

大石内蔵助良雄（おおいしくらのすけよしたか）

四十七士を率いた大石内蔵助良雄の曽祖父・良勝は真岡藩主時代の長重に仕え、家老にまで出世をしました。良勝の子・良欽も笠間藩へ出仕し、この父子が居宅を構えた場所が「大石邸跡」として残され、後の歴代笠間藩主の家老の屋敷として引き継がれました。良勝の弟・信云は、長矩の刃傷事件の第二報を赤穂の国元へ知らせた、大石瀬左衛門信清の祖父にあたります。

■このほかゆかりの赤穂義士

吉田忠左衛門兼亮（よしだちゅうざえもんかねすけ）
大高源五忠雄（おおたかげんごただすけ）
小野寺十内秀和（おのでらじゅうないひでかず）　など

笠間にのこる浅野家のはたらき

浅野長直藩主時代に行われた”都市計画“

浅野家が藩主となる前の笠間藩は、城付き三万石程度でしたが、浅野家が藩主となると五万石に増加。家臣団の構成もそれなりとなり、武家人口や商工業者の増加も必然となったことから、城下町の整備や拡張が必要となりました。

武家屋敷をさらに広げ、「大和田」、「五騎町」、「桧町」、「桜町」、「裸町」「鷹匠町」など笠間城南側一帯を中下級武家町として整備。

町人町としては、寛永17年(１６４０)に「新町」を創設。この成立により、「大町」「愛宕町」「高橋町」「荒町」「新町」の五か町が完成し、以後城下町としての町人町が確立されました。

これらの町割りが現在も引き継がれ、発展を遂げています。

笠間市街にみられる浅野家の痕跡

浅野家と笠間城

当初、政務は笠間城本丸の狭い居館で行われていました。笠間城の山城であるがゆえの不便さと、政務への影響から、長直藩主の時代、寛永20年に現在の佐白山ろく公園の場所に下屋敷が建設されました。

笠間城跡

全国の忠臣蔵
ゆかりのまちが笠間に

第 34 回 義士親善友好都市交流会議

忠臣蔵サミット in 笠間

笠間市合併 20 周年を記念して「忠臣蔵サミット in 笠間」を
11 月 7 日に笠間公民館で開催しました。
全国の忠臣蔵ゆかりの地から、今回は 10 自治体が参加。
ゆかりや取り組みを紹介しあい、交流を深めました。

サミット参加自治体の
紹介動画はこちら

（右から）
玉川 祐子さん、
港家 小そめさん

かさま応援大使 玉川 祐子さんが オープニングに登場

オープニングには、笠間市出身で現役最高齢 103 歳の曲師 玉川 祐子さんが、浪曲師の港家（みなとや） 小そめ（こそめ）さんとともに浪曲を披露しました。

「神崎与五郎東下り」を披露し、小そめさんの唸りと節回し、そして祐子さんのキレのある三味線と力強い声に圧倒される舞台となりました。

地元歓迎ムードで会場があたたまり、最後の祐子さんの「この年になって舞台に上がれれるのは最高の幸せ。感謝感謝です」という一言に皆さん笑顔がこぼれました。

笠間義士会
塙会長による開会宣言

各自治体が
忠臣蔵のゆかりや
取り組みを紹介

神田 伯山さんが忠臣蔵を魅せる

メイン公演には六代目 神田 伯山さんが登場し、赤穂義士伝を披露しました。

演目前段のまくらでは、出演前に巡った、笠間の菊まつりや笠間日動美術館などでのエピソードが披露され、会場大盛り上がり。

笠間にゆかりがある堀部弥兵衛にちなんだ二席「安兵衛駆け付け」「安兵衛婿入り」を披露し、迫力のある講談に引き込まれ、会場が息をのむ一体感につつまれました。

六代目
神田 伯山さん

あなたに夢を。宝くじ 街に元気を。
クーちゃん

令和 7 年度コミュニティ助成事業の
支援を受けて実施しました。

演芸で親しむ忠臣蔵

忠臣蔵のストーリーは、講談・浪曲・落語の題材としても親しまれています。忠臣蔵は壮大な物語です。そのため、講談や浪曲では、いくつにも細かく分けた演目があります。

松の廊下から討ち入りに至る本筋を「本伝」、四十七士の個別の物語を「銘々伝」、義士以外の周辺の物語を「外伝」と呼び、それらが全部で 300 席以上あるといわれています。

笠間市立図書館にある CD 資料などから、ぜひ聴いてもらいたい演目をご紹介します。

ナビゲーターは

社会人落語家の
万葉亭（まんようてい） 小太郎（こたろう）さん！

笠間市包括支援センターの職員として日々励む傍ら、市内などで行われる落語会で落語を披露しています。

大石東下り（おおいしあずまくだり）

忠臣蔵屈指の名場面の一つ。大石内蔵助は、垣見五郎兵衛（かきみごろべえ）という名前を名乗って、討ち入りのために江戸に向かいます。ところが神奈川宿で、本物の垣見五郎兵衛と鉢合わせします。その危機を乗り越えたのは…。

なぜ、忠臣蔵は人気なのか。その真髄がうかがえる一席です。

南部坂雪の別れ（なんぶざかゆきのわかれ）

忠臣蔵ではさまざまな別れの場面が描かれています。それを象徴する名場面がある一席。討ち入りを前に、浅野内匠頭の妻・瑤泉院（ようぜいいん）に暇乞いをする大石内蔵助は、本心を隠しながら別れを告げます。

クライマックスへの緊張感が、最大限に高まるでしょう。

天野屋利兵衛（あまのやりへい）

天野屋利兵衛は赤穂義士を支援した商人。奉行所に疑惑をかけられ、重い拷問を受けながらも赤穂義士の秘密を守ります。

「天野屋利兵衛は男でござる」は、あまりにも有名な決め台詞。外伝の中で最も有名な人物伝といえます。

荒川十太夫（あらかわじゅうだゆう）

討ち入りと四十七士切腹の後日談として語り継がれる感動的な人情物語。堀部安兵衛の切腹の際に介錯人をつとめた下級武士・荒川十太夫のある行動と、その後の人生が描かれます。

浪曲では「誉れの三百石」という演目で披露されています。

中村仲蔵（なかむらなかぞう）

家柄のない歌舞伎役者・初代 中村仲蔵が下回りから這い上がり、「仮名手本忠臣蔵」の斧定九朗（おのさだくろう）役で、苦悩の末に大当たりをとり、スター街道を歩むようになるまでの物語。「忠臣蔵」は、数々の名人が熱をこめて演じてきたことで、今に語り継がれていることを感じさせられます。落語・講談・浪曲で披露されています。

淀五郎（よどごろう）

「仮名手本忠臣蔵」の判官役（浅野内匠頭に相当）に抜擢された沢村淀五郎が、役を演じられずに苦しみ、大看板となった中村仲蔵に教えを乞います。「中村仲蔵」と同じく、「忠臣蔵」を支えてきた名優の心意気が感じられます。落語のみにある演目で、6 代目三遊亭円生が圧巻です。

そのほかにも

※書籍「七つの忠臣蔵」池波正太郎・吉川英治・山本一力・柴田錬三郎・海音寺潮五郎・菊池寛・佐江衆一

大御所たちによる忠臣蔵短編 7 作品を収録。「忠臣蔵」とは、創作のモチーフがそれこそ「蔵」の中にあふれるように詰まっているものだと、改めて感じます。

※DVD「浪曲絶唱ストーリー」

笠間出身の現役最高齢曲師・玉川 祐子さんと愛弟子・港家 小そめさんのドキュメント映画。あこがれて弟子入りした師匠がなくなり、祐子さんに引き取られ、独り立ちしていく小そめさんの芸に対する姿が、涙を誘います。

問 秘書課（内線 224）　生涯学習課（内線 381）